

この建物の美しく雅やかなたたずまいは一同の気に入った。大小の部屋はすべて黄金の品や典雅で華麗な絵画で飾られていた。この屋敷は最近彼の手で建てられ、見事な出来ばえとなった城郭の中にある。その城郭を見たポルトガル人たちは、日本にこれほど壮麗な建造物があるなどと考えてもみなかった。

これはポルトガル人宣教師ルイス・フロイスが記した日野江城の様子である。これ以上ない言葉で、絢爛豪華な様子を讃えている。

文中に出てくる「彼」とは、城の主である有馬晴信のこと。晴信は日本初のキリシタン大名として知られる大村純忠の甥に当たり、彼もまた洗礼を受けたキリシタンであった。

口之津港が南蛮貿易港として開港したのは一五六二年。その翌年にアルメイダ修道士が布教活動を開始すると、キリスト教はたちまち島原半島全体へと広がった。一五七六年には、当時の領主であった晴信の父、義貞も改宗している。

日野江城跡は標高八十メートルほどの丘陵にある。二〇〇〇年に行われた発掘調査では、打ち壊した仏塔を敷石に利用した階段遺構や色彩豊かな陶磁器などが数多く出土しており、これらは晴信が仏教を排したことや、中国や東南アジアとの貿易によって多大な富を得ていたことを示している。

発掘調査の結果、晴信と当時の権力者とのつながりも浮かび上がった。城内で見つかった百メートルに及ぶ階段遺構は、織田信長が築いた安土城の構造とよく似ているという。また出土品の中でもひととき目を惹くのが、金箔が張られた瓦だ。金箔瓦は鳥伏間と呼ばれるもので、これは豊臣秀吉が親族か身近な大名だけに使用を許可したもの。晴信と天下人たちの間には、どんな交流があったのだろうか。日野江城跡の急な山道を上ってみても、そこには何もない。ただ古い石垣があるだけだ。しかし目を閉じるとイメージは駆けめぐる。スペインの商人はこう記している。

広間の戸は二十枚あり、その奥に次の美しい広間が、さらに美しい次の間が現れた。この広間からは海が見えた。

邸内には茶室が設えられ、そこからは庭園が見えたという。日野江城は有馬氏の居城であると同時に、キリスト教繁栄の本拠地であったのだろう。

本丸御殿があった場所からは、同じく晴信が建てた原城の跡が見える。栄華を極めた日野江城からわずか三キロメートルの距離にあるこの城で「あの悲劇」は起こった。

日野江城跡

色鮮やかな破片が
かつての栄華を
伝えている。

中国の陶磁器

日野江城跡から出土した「法花」といわれる中国の三彩陶磁器の壺の破片。中国の官窯として、門外不出の陶磁器であったため、有馬氏の対外的な力を示す資料として注目されている。